

韓国済州島のマウル祭祀

—— 南済州郡城山邑水山2里の事例から ——

政 岡 伸 洋

はじめに

韓国済州島にはひとつのムラにおいて、儒教式と巫俗式という2種類の村祭祀が行なわれており、前者は男性を中心に執り行われるのに対し、後者はシンバンと呼ばれるシャーマンと女性が中心になることが指摘されている。そして、これまでの研究では巫俗式のものが済州島の特徴的な祭りとなされ、これを対象とするものが多く、マウル祭祀とも称される¹⁾ 儒教式の村祭祀については十分に検討されることが少なかった。その背景として、済州島における儒教の普及と民間信仰への影響に対する理解の問題もあるようである²⁾。この点に注意しながら済州島における儒教の普及についてみると、李成桂が朝鮮を建国した1392年には済州島に済州郷校がおかれるが、さらに1416年に済州牧・大静県・旌義県の3県が設置され行政組織の整備とともに大静郷校と旌義郷校が設けられて1県に1郷校のシステムが完成された。そして、これを拠点に指導理念としての儒教が済州島に浸透していくことになる。その結果、済州島の民間信仰にどのような影響を与えたかといえ、玄容駿(1985)によれば、その郷校の活動とともに済州島へ中央政府の党争に敗れた高名な政治家や学者が流れ、その教育活動などから済州島における男性社会の儒教教育水準が高まり、それが普及しなかった女性社会との間に格差ができたため、男性＝儒教式祭儀、女性＝巫俗式祭儀といった民間信仰の二重構造が生まれてきたとされるのである。そして、社会的に公

1) マウルは日本のムラを指し、祭祀といえは韓国では儒教式の儀礼に限定される。

2) また、開放的で誰でもみることのできる巫俗式の村祭祀に対して、儒教式の方は村人のなかでも特定の者のみが参加し、女性や他村の人は見ることができないなど閉鎖的な側面が強く、その資料収集が困難であるという調査そのものの問題もあるのかもしれない。

認された儀式においては儒敎式のものを用いられ、それでは果たせない部分を巫俗式で補うというように、両者は対立するものではなく、相互補完的な性格をもち、両者が結びつくことによって1つの完結した民間信仰体系をなして現在に至ったとするのである（玄容駿：1985）。

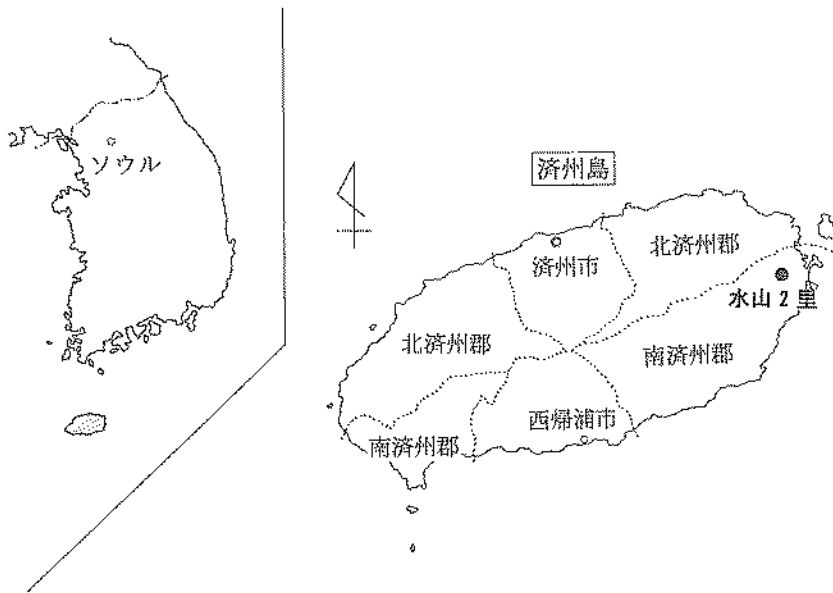
このような視点からすれば、済州島の民間信仰は本来巫俗的なものであったのが儒敎の浸透により、男性的な一部分が儒敎式儀礼として分離したということになり、民間信仰研究にとって本論の対象である儒敎式の村祭りに対する認識は、あくまで全体像を明らかにするための補足的な研究分野となってしまう、実際に今日の研究状況もそのバランスは著しく偏ったものとなっているのである。

このような状況の中で、玄容駿（1971）は済州島の儒敎式の村祭りをとりあげ検討しているが、この中で氏は数多くの事例をふまえ、その全体的な傾向を指摘した上で論を展開しており、その内容はこの祭りを考える上で非常に参考になる。しかし、その関心の中心は巫俗式との関わりの中かでどのように儒敎式の祭祀形態が浸透していったかという形成史的な部分におかれており、ある意味でこれまでの巫俗式の村祭りを検討する際の視点とほとんど変わらない点も指摘できるのである。

さて、ここで注意しなければならないのは、巫俗式と並んで儒敎式の村祭りも地域社会のなかで現在まで続けられているということは、ここに住む人々にとって今日でもなんらかの意味が当然あるはずなのであるが、従来のように本来一つであったものがどのように2つに分かれていったかという過去にだけ目を向けた研究だけでは、高度経済成長を経て、生活環境が大きく変化してもなお続けられている点を十分に明らかにできないということである。

そこで、本論では、南済州郡城山邑水山2里の儒敎式の村祭りであるボジェを事例として、これが今日まで地域社会にとってどのように位置付けられ、そして現在どのような意味をもって執り行われているのか、その民俗的意義について検討を試みることにする。なお、ここを選んだ理由としては、済州島のなかでも儒敎がもっとも浸透したとされるいわゆる中間村（陽村）に位置するとともに、地元の人々の協力をえて実際に祭りを見ることができたことなどがあげられる。そして、本論をまとめるにあたっての主たるデータは、筆者が1995年3月から97年2月までの2年間、国立済州大学校の教員として赴任中に調査したものに、帰国後佛敎大学総合研究所の研究協力者として追加調査した際の資料が中心となっている。なお、写真等はボジェに参加できた1996年の時のものである。

ところで、今回取り上げた水山2里であるが、済州島の東側に位置し、主な産業は



図① 調査地とその周辺

米と粟を中心とする農業であった。なお、米は陸稲であり、これは海岸村との物々交換に用いられるもので、主食は粟であったという。この他、蕎麦や稗などの雑穀類や肥料獲得のための牧畜も行なっていたそうである。なお、現在では畑を雑穀類からミカンに替え、これが主な現金収入となっている。戸数は、日帝時代には隣の水山1里と合わせて約300世帯であったというが、1948年に始まった4・3事件により消滅し、その後再び戻ってきた人々によってムラが再興され、現在では約60世帯の家族が生活を営んでいる。

1. ポジェの行事内容

水山2里の儒教式の村祭りはポジェ（醔祭）と呼ばれ、旧正月（立春）すぎの丁または亥の日にポジェダン（醔祭壇）と呼ばれる祭場で行なわれる。ここは石垣で囲まれ、南側の東寄りに入口があり、祭神である醔神を祀る祭壇は奥の北側の壁に接するように設けられている。ポジェは悪いものを祓い、ムラの安寧と平和を祈願するものとされ、これをしないと凶作や若い人が死んだり、現在の主たる産業であるミカンの収穫が減るなど、不幸なことが続くといわれている。なお、3日前より籠もりはじめるが、その前に死者がでると次の丁または亥の日に延期する。また、当日に人が亡く

なりそうであれば、不浄を避けるためにすぐに祭壇へ行行って準備し祭祀を行なうとい、これはこれまでに実際にあったという。これに参加する祭官たちも祭りの前後には事故現場など悪い場面に遭遇しても決してみてはいけないとされている。この他、ポジェは昔はそれぞれの季節ごとに年4回していたが、その後正月と7月の2回となり、現在では正月のみとなっている。では、現在行なわれている行事内容について具体的にみてゆきたい。

(1) チョチプサバン

旧暦12月15日にはマウル会館という里の集会所にムラの世帯主が集まり寄合が開かれるが、この時にチョチプサバン（初執事務）といって、ポジェに参加する祭官13人を決めることになっている。これは正式決定というよりも予選のようなもので、祭りまでの間に変化があるといけないので、3日前の入祭の直前の寄合で正式決定される。なお、チョチプサバンの「榜」というのは官吏登用試験の合格者の名を書いて発表する札のことで、実際にこの水山2里でも最終決定されると、役割分担を紙に書いて発表することになっており、済州島における儒敎の受容の背景を考える上で興味深いものであるといえる。

(2) 供物の種類と準備

ポジェで供えられる供物はチェムル（祭物）と呼ばれ、以下の通りとなっている。

- ① ヒソン 犠牲のことで、豚1匹を使う。
- ② ロッポ 鹿脯と書き、鹿の肉を使う。昔は白丁が捕ってきて、その肉を干して使っていたが、現在では鹿が禁猟になっているので、代わりに牛肉を使用している。なお、この時の牛肉はチュリョムといって、チョチプサバンの翌日に牛を殺し、祭礼用の肉を分けておくそうである。
- ③ ロッケ 鹿醢と書き、鹿の肉を塩辛のようにしたもので、今は牛肉で代用している。
- ④ オス 生の魚のこと。
- ⑤ オヘ 魚醢と書き、魚で作った塩辛をさす。
- ⑥ チョンジャ 青物のことで、芹などを用いる。
- ⑦ クンジャ 根の物のことで、大根などが用いられる。
- ⑧ ユルァン 栗・榧子・りんご・ミカンなど。

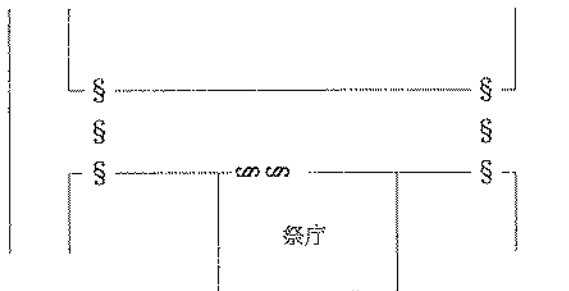
- ⑨ ヨム 塩のこと。
- ⑩ ピェベツ 幣帛のことで、現在では紙で作るが、昔は紙とサムベと呼ばれる質の荒い麻織物を作って用いたといわれている。
- ⑪ ヒャン 香のこと。
- ⑫ チョ 蠟燭のこと。
- ⑬ メ 穀物の梗を指し、ト(稻)・リャン(粱=粟)・ソ(黍)・チッ(稗)の4種類を供える。ただし、現在では黍と稗はないので、米と粟で代用する。
- ⑭ チュドツ 酒を作る壺のことで、米とコルで甘酒を作る。これは祭祀の前日に作り、上澄みのみを用いる。また、この時残った米は祭官がご飯として食べる。材料の米はチェミ(祭米)といって、ムラの全世帯から集められたものである。

以上がチェムルの概要であるが、これらの供物は穀物のみが三献官と典祀官で、その他は典祀官が祭祀の約1週間前から準備し、たいていは生のままで使用するが、穀物は蒸して供えられるため、祭庁で調理される。また、これらの費用は、昔はムラ内の全世帯から米で集められていたが、現在ではお金で徴収される。そして、三献官と執礼・典祀官が集まり予算を決め、大祝がこれを記録することになっている。

さて、これらの供物の種類については玄容駿(1971)で指摘されているものとほとんど違いはみられず、その形式は郷校式のそれを踏襲したものとなっている。

(3) 入祭

祭りの3日前になると、マウル会館で祭官が正式に決定される。そして、ここで祭官に任ぜられた者はハンムル(香水)で身体を清めたあと祭庁に籠もる。この祭庁に選ばれた家では、図②のように門前とその前を通る道の入口の両側にクムジュール(祭縄=注連縄)が張られ、また祭りの行なわれるタンにも張られることになっ



図② クムジュールの位置

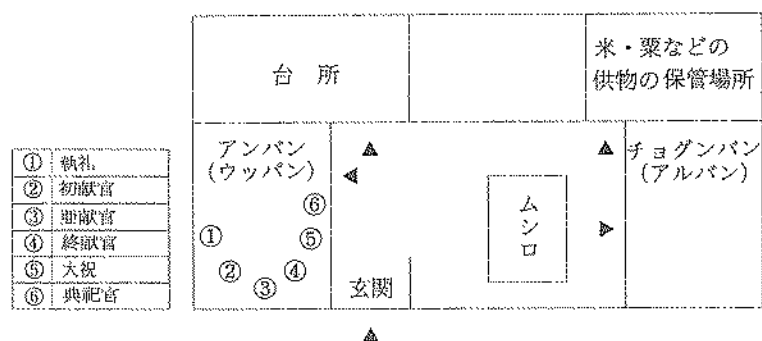


写真① 入祭前の祭官の最終決定（マウル会館にて）

ている。

祭官たちが籠もる祭庁についてであるが、これは典祀官が決めることになっており、その際の基準としては祭礼の準備を行なうための大きさがある家で、2年連続ですることはできないが、務める機会の多い家はあるそうである。そして、ここではお神酒や供物を作るので、不幸のあった家や、生理のある若い女性（30～40歳代）のいる家も避けるという。

祭庁では、三献官および執礼・大祝・典祀官は韓服（パジ・チョゴリ）を着ることになっているが、それ以外の者はとくに決まっていない。また、図③のように、祭庁に籠もっている間、アンバンとチョグンバンという2つの部屋に分かれて寝起きをと



図③ 祭庁内部の様子



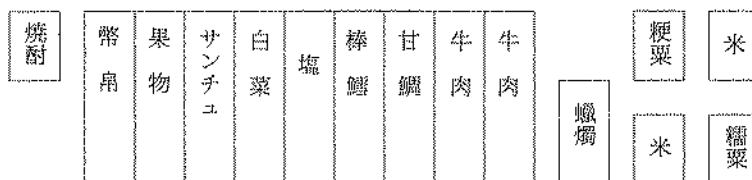
写真② 祭庁での食事風景（アンパン）

もにするのであるが、上部屋とも書かれ夫婦の寝室や家の祭祀も行なわれるアンパンには三献官をはじめ、執礼・大祝・典祀官が籠もり、ここにはそれ以外の者は執礼の許可がないかぎり入ってはいけないとされ、それも贅者以下で入ることができるのは謁者のみとなっている。アンパンのメンバーの食事の際には、現在では一つのテーブルで摂ることになっているが、昔は謁者が一人ずつの膳を運んでいたという。なお、それ以外の者はチョグンパンに入るが、彼らは食事を摂るのにもアンパンのメンバーの許可が必要であったというなど、ここに入る者はアンパンのメンバーに絶対服従であったとされている。この他、家を祭庁に提供した家族も一緒にここで生活するのであるが、祭官のいる部屋には入ってはならず、掃除や給仕もすべて男性が行なうことになっている。また、祭官同様に外へ出掛けてはならず、他の人が所用でここにくるのはかまわないが、祭官のいる部屋には決して入ってはならず、女性や忌中の人はここにきてはいけないといわれている。

さて、祭官たちはこの祭庁で3日間籠もるわけであるが、その間外に出てはならず、筆者の調査した時には家族との連絡も電話などで済ませていた。また、祭りの練習を何度も行なう。それは、祭祀の時に執礼が謡うホルギ（笏記）は1度口に出したら2度と繰り返すことはできないことになっており、絶対に失敗は許されないの、あらかじめ何度も確認しておく必要があるためである。

(4) 前日から当日の動き

前日の午後からいよいよ祭りの本番の方へ入っていく。午後4時ごろになると、祭官全員がハンムルで身を清め、青衣に儒冠を被って正装し祭礼の準備をはじめ。

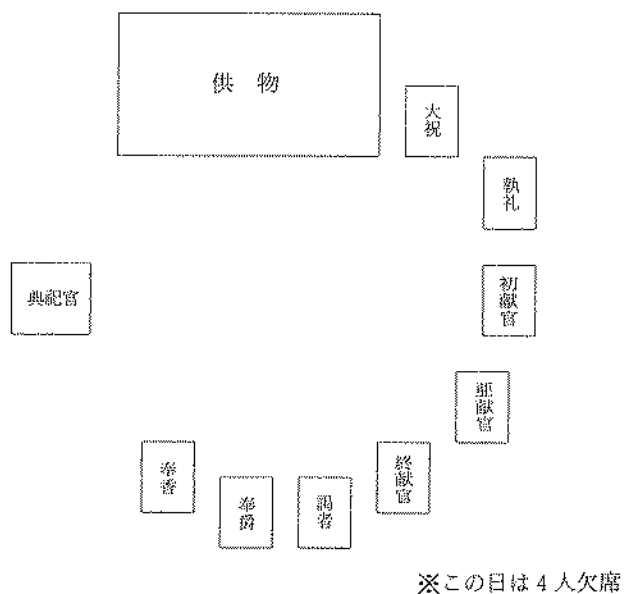


図④ 供物の配置



写真③ 準備され並べられた供物

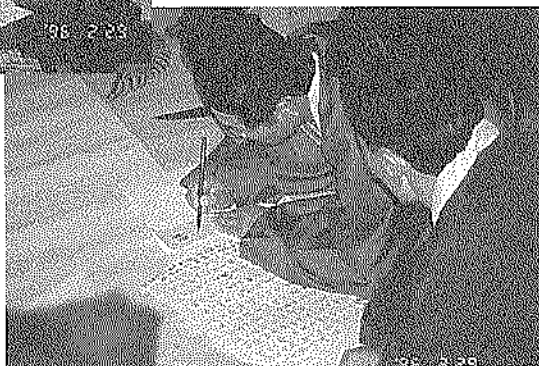
まず、供物を準備するのであるが、水稻の米と陸稻の米、粳粟と糯粟をボウルに移し替え、つづいて他の供物をセと呼ばれる蕨東で作った皿の代わりのもののなかに入れていく。その順番はロッパ(牛肉)→ロッケ(牛肉)→オス(甘鯛)→オヘ(棒鱈)→ヨム(塩)→チョンジャ(白菜の煮たもの)→クンジャ(サンチュ=サニーレタス)→ユルァン(なし・りんご・みかん・干柿・榎の実・なつめ・栗を一つに包む)となっており、図④のように並べていく(カッコ内は1996年の場合)。なお、ヒソンの豚は別の場所に内蔵と毛血を分けて置いておく。そして、全員が図⑤のように座ると、大祝が執礼の指示に従い紙を切り、「酬神之位」と書かれた神位を作る。つづいて大祝が祭祀の時にあげられる祝文を書き、出来上がると初献官から順に全員が内容を確認していく。そして、稻・梁・黍・稷の順(1996年の時には米→粳粟→糯粟→米)に執礼が読み上げ、これを典祀官が確認したあと、先と同様に初献官から順に全員に回して確認してもらう。これが終わると、大祝が「封」と書いた紙をまず4枚作り、確認した穀物それぞれに挿す。そして、典祀官がセに包まれた供物を籠のなかに入れて紐でくくり、そこにも「封」とかかれた紙を付け封印する。なお、別の場所に置かれたヒソンの豚と内蔵・毛血にも同様のことをする。



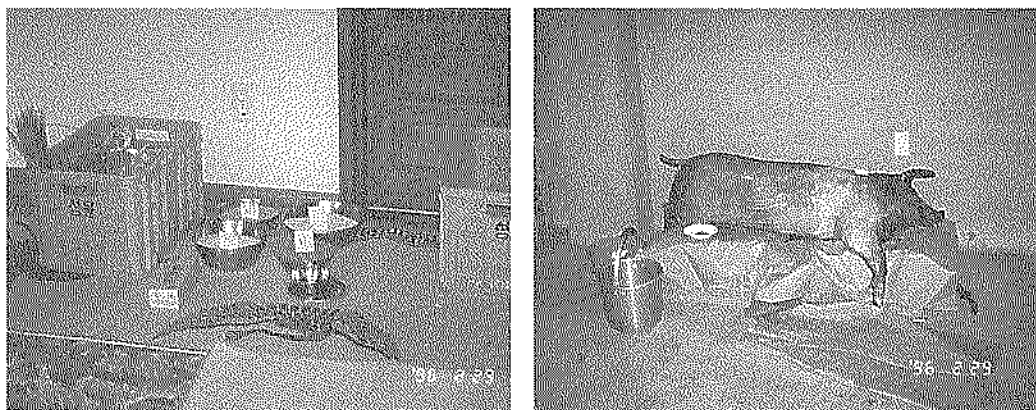
図⑤ 前日の準備の際の祭官の位置



写真④-1 祝文を書く紙の確認



写真④-2 大祝が神位を書いているところ



写真⑤ 封印された供物

供物の準備が終わると、再び全員が先の順に座り、白米のみのお粥が初献官から順に出される。この時にはキムチなどおかず類は一切なく、お粥だけをスッカラッで一斉に食べる。そして、全員が食べおわると執礼が目で合図し、食器が片付けられ、準備は終わる。これらの行事の間、執礼が供物の名を読み上げる以外は一切無言で厳粛に行なわれる。



写真⑥ 準備終了後の食事風景

その後、夕食のあと午後7時ごろから約1時間ほど祭祀の練習を行ない、最終確認を行なう。夜11時ごろになると出発の準備を始め、午前0時前に着くようにトラックに供物を積み各自自動車でポジェタンへ向かう。なお、本来は列を組んで歩いて行っていたそうである。

タンに着くと、祭祀の準備をはじめるが、供物の配置などは執礼の指示のもとす

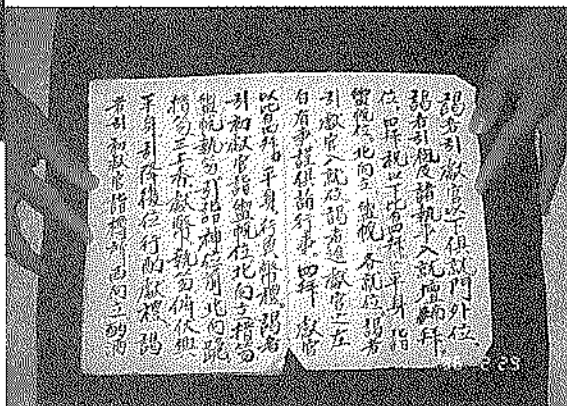


写真⑦ ポジェダンでの供物の準備

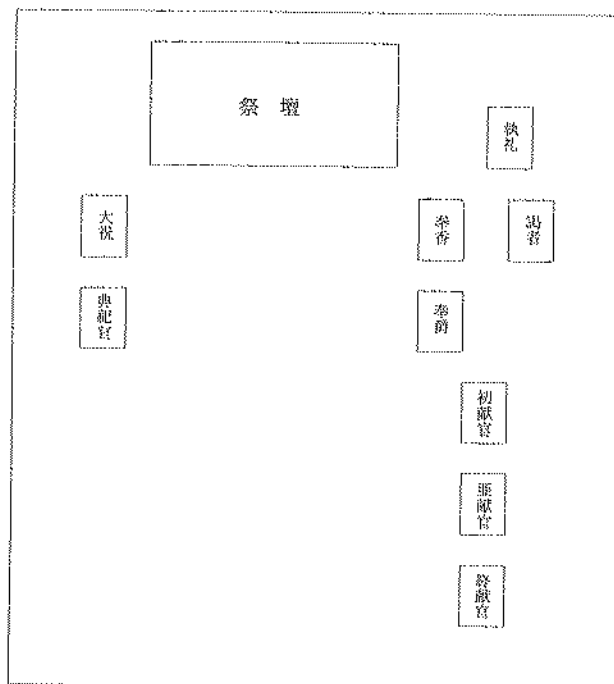
められ、準備が終わると全員が一旦タンの外へ出る。そして、執礼が全員揃っているか尋ね、調者がそれに答えると、午前0時から祭祀がはじめられるのであるが、執礼が謡うホルギにあわせて祭祀が執り行われ、その内容は次の通りである。



写真⑧ 「酬祭笏記」



謁者引獻官以下俱就門外位。謁者引祝及諸執事入就壇南拜位。四拜祝以下皆四拜平身詣盥洗位北向立盥洗各就位。謁者引獻官入就位謁者進獻官之左白有事謹俱請行事。四拜獻官位皆四拜。平身行贊幣礼謁者引初獻官詣盥洗位北向立搯笏盥洗執笏引詣神位前北向跪搯笏三上香獻幣執笏俯伏興平身引降復位。行酌獻礼謁者引初獻官詣樽所西向立酌酒引詣神位前北向跪搯笏獻酌執笏俯伏興小退跪。誦祝祝以進神位之右東向跪。誦祝俯伏興平身引降復位。行垂獻礼謁者引垂獻官詣盥洗位北向立搯笏盥洗執笏引詣樽所西向立酌酒引詣神位前北向跪搯笏獻酌執笏俯伏興平身引降復位。行終獻礼謁者引終獻官詣盥洗位北向立搯笏盥洗執笏引詣樽所西向立酌酒引詣神位前北向跪搯笏獻酌執笏俯伏興平身引降復位。飲福受胙執事者以爵酌福酒。執事者持胙進減神位前胙肉謁者引初獻官詣飲福位西向跪搯笏執事者位爵授獻官。獻官位受爵。飲卒爵位爵受執事者。執事者受虛爵。執事者位受胙授獻官。獻官以受胙位授執事者。執事者受胙降自東階詣出門。執笏俯伏興平身引降復位。四拜獻官皆位四拜。平身饗豆祝以進撤饗豆四拜獻官皆位四拜。平身望燎祝以入以簠取祝板毛血及幣降自西階詣置于坎。謁者引初獻官詣望燎位西向立祝以焚祭文盞燎。謁者引獻官之左白礼畢。遂引獻官出門。謁者引祝及諸執事俱覆壇南拜位四拜祝以下皆四拜平身以次出門。



図⑥ ポジェダンにおける祭官の位置



写真⑨ 祭祀風景（大祝が祝文を読んでいるところ。なお中央で座しているのは初献官）

この形式については、ムラによって文章表現の多少の違いこそあれ、だいたい同じものとなっており、玄容駿（1971）ではこれが郷校の祭儀と同様である点を指摘している。なお、筆者の調査した時の祭官の動きを簡単にまとめると、まず執礼と謁者が入場して4拝し、つづいて執事4人が手を洗い拝礼したあと、三献官が入場し図⑥のように決められた位置につく。そして、執礼がホルギを謡いはじめ、これに合わせるように初献官が拝礼し執事の補佐のもとで奉爵する。拝礼が終わると、初献官に代わって大祝が祝文を読み上げこれを祭壇に捧げるのであるが、その内容は次の通りであった。

維歲次丙子正月丙戌朔十二日丁酉初献官□□□

敢昭告于

酹神之靈	伏位	天地元氣	肆命於人	明神威德
		降福於民	在者吾鄉	寶類孔仁
		為及新正	奠薦罪薄	物□不腆
		誠則廉忒	萬□攸欽	神号降格
		扇以和氣	錫以寿福	萬祥雲集
		天災雪消	病乃回春	農之有秋
		壯丁活潑	老幼健康	衆業大利
		百果登豐	六畜蕃殖	錢穀積倉
		水火盜賊	乃驅乃逐	官災口舌
		勿神防曲	醉以神休	飽以神德
		俾比一鄉	永世康樂	昭答如饗

享之無数 謹以牲幣 醴齊粢盛

庶品式陳 明薦干神 尚

饗

この祝文の内容については、「百果登豊」や「六畜蕃殖」というように、地域の生業のあり方などその実情を反映したものとなっており、それぞれのムラにおいてどのようなものを祈願しているか、その地域性を考えるうえで参考になるものである。

これが終わると、つづいて亜献官が手を洗いこれも執事の補佐で拝礼奉饗する。亜献官につづいて終献官も同様に拝礼奉饗すると飲福があり、初献官が前に出て酒と豚を供えたあとに酒を飲む所作をする。そして、亜献官が拝礼のみを行ない、初献官がもう一度前にきて拝礼をする間に大祝が祝文と幣帛を燃やすのである。このあと、初献官から順に退場し最後に執礼が拝礼して全員がボジェダンの外へ出る。そして、再



写真⑩ 執礼以下が最後に退場するところ

び全員がタンのなかに入り、酒や豚の生肝など供物のうちでそのまま食べることできるものでもう一度飲福が行なわれるというものであった。このボジェの行なわれるボジェダンは集落からかなり離れた小高い丘のうえにあり、かすかな提灯の明かりだけの暗闇の静寂なかで、執礼の読み上げるホルギの声だけが響き、独特の雰囲気なかで行なわれていた。

これら一連の行事がおわると、祭官たちは残った供物を持って再び祭庁へ帰ってくる。この時にはもうクムジュルははずされており、到着するとまずここでヒソンの豚を解体し14人分に分ける。それは、祭官13人分とムラのなかで最年長者のいる家にも分けられることになっているためである。そして、残りの肉はカルビは焼いて、内蔵

はスープにして他の供物とともに調理し、これを肴に酒を飲む。ある程度すれば、祭官たちはそれぞれ残っている者にあいさつして帰っていき、ポジェはおわる。

(5) まとめ

以上、ポジェの行事内容についてみてきたのであるが、これらの形式は玄容駿(1971)でも指摘するように、郷校の祭儀を踏襲したもので、供物の種類も同様であった。つまり、ポジェは李王朝時代における地域の儒教教化実践の場たる郷校の祭儀をそのまま受け容れようとしている点が指摘できるのである。

ただし、このポジェを単なる前時代の国家的儒教の模倣としてだけ評価するには問題がある。とくに祝文の内容は地域の実情を反映したものであり、地域社会の生活の安寧を祈願するという点においては十分意味のあるものといえよう。

このような点をふまえた上でポジェの儀礼的特質をまとめるとすれば、韓国における理想的な儒教の実践をめざすとともに、地域の生活の安寧についてその実情にあわせて祈願する祭祀といえることができる。

ところで、ここで問題となるのが、なぜこのような祭りが儒教式でなければならないのかという点である。済州島にはこれと同じ時期に巫俗的な儀礼形式で同様の目的の祭りも行なわれており、これだけでも十分な気もするし³⁾、あえて儒教式で行なわれなければならないという積極的な意味がわからない。また、本来、年4回行なわれてきたものが2回となり、さらになぜ現在では1回となったのか、これらの問題は従来の地域民俗学的解釈だけでは十分理解できないのである⁴⁾。そこで、次章ではなぜ現在においても儒教式でなければならないのかという点に注意しながら、祭祀組織の問題を考えてみたい。

2. 祭祀組織の構造と特質

(1) 役職の名称と任務

ポジェを行なう祭祀組織は祭官と呼ばれ、現在では13人で構成されている。これらの役職は昔から水山2里に住む両班が務めるものとされており、常民はできなかったといわれ、現在でもこれは変わっていないとされている。

3) ポジェと同様に、正月に巫俗式で行なわれる新過歳祭でも村の安泰や生業の豊饒などが祈願され(玄容駿:1985)、両者の目的は内容的にはほとんど違いがみられない。

4) 生活環境が改善されたということも一つの理由かもしれないが、それではなぜ儒教式のものがだけ減り、簡略化されたとはいえ巫俗式の回数はあまり変わらないのかという点がわからない。

本来、この祭官は17人で構成されており、以下に記す13人以外に4人が加わっていた。これは豚を殺す役の者で、白丁と呼ばれる被差別民の仕事であったという。そして、現在ではこの仕事はお金を払ってするようになったため、現在の人数になったといわれている。では、現在の役職名とその任務について紹介してゆきたい。

- ① 初献官 最初に酹神に対して酒や香などを捧げる役で、現在では行政村である水山2里の代表の里長が務める。なお、以前歩いてポジェダンにいた頃は、その移動の際に絶対に荷物を運んではいけなかったといわれている。
- ② 亜献官 初献官につづいて酹神に酒や香を捧げる役。
- ③ 終献官 亜献官につづいて、最後に酹神に酒や香を捧げる役。なお、初献官・亜献官と合わせ、この3つの役職を三献官と称し、行事の中心的な役職とされている。
- ④ 執 礼 行事の司会者。どんな細かなことであっても行動ごとに初献官に伺った上で、他の人に指示して行事を執り行う。この執礼には行事のことをよく知っている人が務めることが多く、行事の際にはホルギを謡う。なお、酒を飲むときなどは、まず初献官にすすめるが、双方が譲り合い、最終的には執礼から先に飲むといい、また席順も双方譲り合ったあとに上座に座るなど、形式上は三献官の次になるが、実際はこれよりも優遇されることが多く、いちばん重要視されている役職でもある。
- ⑤ 大 祝 行事の時に祝文を読む役で、祝文の他、酹神の位牌を書くのも重要な任務である。
- ⑥ 典祀官 供物である祭物を準備する人で、ポジェダンに運ぶまでの責任をもつ。祭物の管理責任者である。
- ⑦ 贊 者 執礼の補佐をする。三献官が礼をしたり起きたりするのを促したり、細かな行動の指示を執礼の読むホルギにあわせてする。
- ⑧ 謁 者 執礼の側にいて、各祭官の動きを案内する。執礼の秘書のようなものといわれ、執礼から絶対に離れない。なお、祭官が祭庁に籠もっている間、アンパンにいる①～⑥までの人々の布団や食事・水の世話もする。
- ⑨ 奉 香 香を捧げる役。また、飲福のときには献官に酒を注いだりする。
- ⑩ 奉 炉 炉を捧げる役。
- ⑪ 奉 爵 司樽が注いだお酒を献官に渡す役。ポジェダンまでは奠爵の次に重い

荷物を運ぶ。

- ⑫ 奠 爵 献官から杯をあずかって供える役。ポジェダンまでは司樽の次に重い荷物を運ぶ。

- ⑬ 司 樽 酒を注ぐ役。ポジェダンまでいちばん重い荷物を運ぶ。

以上、ポジェに関わる役職の名称とその任務についてみてきたのであるが、このうち①～⑥が行事の主役であるといわれている。また、⑨～⑬を執事ともいい、雑用係のようなものとされている。なお、これらの名称および任務は⑬の司樽を除き他のムラでもみられる儒教式祭祀のそれとほとんど同じであることがわかる。そして、これは郷校の12祭官とほぼ同じものであることが玄容駿（1971）からも指摘できるのである。

(2) 祭官の選出方法

祭官の本来の任期は1年で、2年続けて務めることはできなかった。未婚者はなることができず、かならず既婚者であることが条件となっている。また、親子が同時に役職に就くこともなく、最初にも述べたように、これには両班のみが任せられ、妾の子は父が両班であっても息子は常民となることから、正妻の子だけが務めることができたといわれている。この他、家に不幸があれば、できないことになっている。

つぎに、選出の順序であるが、まず初献官を最初に決める。現在では里長がこれを務めることになっているので、里長の任期である2年間連続して担当することになっているが、本来は里長とは別に選り、毎年交代していた。そして昔は、ある年にA氏が務めると、次の年はB氏というように、毎年違う姓の者が務めることになっていたという。そして、初献官にあたった門中の水山2里に居住する年寄が集まって、門中内の世帯主のうちどの者が務めるかを決めたそうである。なお、この初献官に選ばれる条件としては、年長者が選ばれることが多いが、夫婦揃っている者でなければならず、いくら年長者でも離婚したり、妻が亡くなった者は務めることはできなかったという。そして、宗家であるかどうかよりも、だいたい水山2里に住む門中内の年齢順で順番に務めていったといわれている。また、祭官のなかでこの初献官が最年長者になるようにも考慮されることになっているそうである。

さて、初献官が決まると、次に執礼を決める。これには既婚者であれば若い人でもかまわないといわれているが、ホルギについてよく知っている人でなければならないとされ、実際にはある程度年齢を重ねたものでなければその任務を果たすことが難しいとされている。そのあと、亜献官・終献官の順に決めていくが、この際に注意する

点として、三献官のなかに同じ姓の者が入らないように3つの姓でふり分けることになっていることである。また、典祀官は祭物の準備などがあるので、1年前からその予備とともに2人決めておくという。

この他、三献官・執礼・大祝・典祀官といった役を務めたものは、そのあとに贊者以下の役職に就くことはできないとされている。また、初めて祭官になる人はお礼として、酒・餅・煙草などを祭庁に集まったときに全員に渡すことになっており、さらに典祀官以上を初めて務めるときにも同様のことをすることになっている。なお、うわきではあるが、祭官が罪を犯してもボジェが終わるまで捕まえることができないともいわれている。

(3) まとめ

以上、ボジェの祭祀組織についてみてきたのであるが、その特質として次の点が指摘できよう。まず、祭官の種類をみると、ほとんど郷校の12祭官の形式を踏襲しており、李王朝時代の理想的な儒教の実践という意味でその儀礼的特質とも対応していることがあげられる。そして、これをムラ内の門中のバランスをとりながらも、宗家に偏らず門中内で年齢順にすべての人がこれを務めていくというシステムになっているのである。これは別の視点からみると、祭官を務めるということは門中を代表して儒教を実践していくことに他ならない。この点からすれば、初めて祭官になった時や祭祀の中心である典祀官以上になった際に、他のメンバーに酒や餅などを持参するという事例は通過儀礼における承認儀礼との関連を想定させ、非常に興味深い。つまり、儒教を実践する祭官を務めるということは、水山2里の人々にとってひとつの社会的なステータスを獲得するという意味をもっていることを示しているのである。

おわりに

以上、ボジェの概要についてみてきたのであるが、その特徴として次の点が指摘できる。まず、儀礼面についてであるが、韓国における理想的な儒教の実践をめざすとともに、地域の生活の安寧について、その実情にあわせて祈願しているという点があげられよう。酺神の「酺」は本来、天子が臣下や民衆に酒食をたまわることの他、人に災害をもたらす神という意味をもつ語である。とくに済州島の場合、自然環境が厳しく、この神を年の始めに祀ることにより、1年間のムラの平和と安寧を祈願するという解釈は十分に成り立つ。また、祝文は地域によりムラの漁業や農業・牧畜といった生活環境のあり方に合わせてさまざまであり、この点からすれば従来のような地域

民俗学的解釈でも説明できる⁵⁾。この場合、ポジェの回数が減って正月のみになった背景の一つとしては、生活環境の改善ということがあげられることになる。

しかし、このような解釈だけで本当にポジェは説明できるのであろうか。地域社会に密接に関連した儀礼は何もポジェだけでなく、巫俗式による祭りも同様に行なわれているのである。そこで、われわれが考えなければならないのが、なぜあえてここに儒教式の祭りが併存しなければならないのかという点である。

これについて注目すべき点として、儀礼の形式面で儒教式の祭祀方法を遵守しようとする意識が非常に強いという点である。そして、ここでいう儒教とは李朝時代の両班の実践する朱子学のことであり、換言すれば両班を前提とした儒教の実践であるともいえる。たとえば、ポジェの前日に祝文を全員の前で書いてこれを参加者に回してみてもう行為や漢文で書かれたホルギを誦い、それに合わせて行事を進行させることなどは、相当の漢文に対する知識と理解するだけの能力が問われることになる。とくにホルギの理解について、韓国では日本のように読み下し文にするという習慣はなく、そのままの音を発音していくだけで、よほど漢文に精通していなければまったく理解できないのである。そして、日本の植民地支配以前においてこのような能力を持っていたのは支配階級たる両班のみであったのである。これは、ポジェに参加できるのは両班のみであるといった話や、役職者の決定に対して官吏当用試験の合格者の掲示方法を用いたりする点とも対応している。つまり、この行事に参加することにより、参加者個人のみならず、所属する門中の両班としての社会的地位を保障する場ともなっているのである。それ故、祭官になるということが通過儀礼的な意味をもつことになるのであろう⁶⁾。そして、ここで注意しなければならないのは、ここでいう両班をめぐら問題とは李朝時代のそれではなく、あくまで現在の民俗に関わるものであるという点である。

これについては、末成道男（1987）や岡田浩樹（1996）などによって指摘された

5) この点について、筆者が以前調査した北済州郡旧左邑金寧里でも、ポジェの祭官はワカメの漁場内で最もよく採れるところに当たった洞の者が務めるとか、当地の粟作に欠かせない馬の鳴声がすれば吉など、地域社会の生活と密接に関連していることを示す話が聞かれた（政岡：1995）。

6) また、これを考える上で注目される点として、本来は豚の屠殺を担ってきた白丁という被差別民の役職がなくなっても問題がないということである。つまり、厳密に言えば本来の意味のままこのポジェが行なわれているのであれば、どんな役職であろうとなくなってしまうということはいえない。つまり、両班のみの役職が残り、他の階級のものがなくなってしまったということは、たとえお金で解決するにしても、この祭りにおいて両班であるということが何よりも村人の第一義的な意味を持っていることを示しているのではなかろうか。

「両班化」の議論が注目されよう。これらはあくまで家族制度の問題として議論されてきたものであるが、それをムラというひとつの社会において認知する場という理解が可能であれば、このポジェが現在においても行なわれているということは非常に興味深い事例であるといえる。ただし、このような儒教式の村祭りがこれからもその意味をもって存続するとは限らない。なぜなら、「両班化」というのは国民レベルの論議であってムラというミクロレベルの問題ではないからである。この点について、済州島では村内婚が多く、半島部に比べ完結性が顕著であるといわれている。また、島という条件は韓国内では特別な意味も持っており、かつ文化的差異も強調されがちである。これらが背景にあって依然としてムラレベルの意味が強調されているのかもしれない。いずれにしても、済州島の儒教式の村祭りは従来のような地域民俗学的な視点だけではなく、近年の民俗学などで議論されているような近代や政治性といった視点、とくに国民国家概念の問題とも関連させて考えていく必要があるものと考えられる⁷⁾。

〔参考文献〕

- 泉 靖一 1966 『済州島』(東京大学東洋文化研究所)
 岩田 重則 1998 「民俗学と近代」(『日本民俗学』215)
 岩竹美加子 1996 『民俗学の政治性—アメリカ民俗学100年の省察から』(未来社)
 岩本 通弥 1998 「民俗・風俗・殊俗—都市文明史としての「一国民俗学」」(『現代民俗学の視点』3、朝倉書店)
 1998 「「民俗」を対象とするから民俗学なのか—なぜ民俗学は「近代」を扱えなくなってしまったのか—」(『日本民俗学』215)
 岡田 浩樹 1996 『韓国社会の動態と「両班化」—忠清北道阿房郡における門中と儒式儀礼の検討を通して』(総合研究大学院大学博士論文)
 嶋陸奥彦・朝倉敏夫 1998 『変貌する韓国社会』(第一書房)
 末成 道男 1987 「韓国社会の『両班』化」(『現代の社会人類学』1、東京大学出版会)
 玄 容駿 1971 「済州島の儒式部落祭」(『石宙善教授回甲紀念民俗学論叢』、石宙善教授回甲紀念論叢刊行委員会)

7) このような点からすれば、今後は衰退してくるかどうかは、韓国内における済州島の位置付けと深く関わってくる問題となる。それが起こり得る時とは、韓国内において済州島という特殊性、言い換えれば島社会の完結性が失われ、韓国社会に完全に組み込まれた段階であると考えられるが、筆者が済州島に滞在した2年間においても学校教育を中心として方言撲滅運動ともいうべき状態が続けられており、その独自性をなくそうとする動きが内外からすすめられている。いずれにしても、今後は済州島のさまざまな民俗についてこのような視点からも検討し、その後の展開も見守っていく必要があるように思われる。

- 1973 「信仰儀礼」(『済州道文化財および遺蹟総合調査報告書』、済州道)
- 1985 『済州島巫俗の研究』(第一書房)
- 古田 博司 1995 『朝鮮民族を読み解くー北と南に共通するもの』(ちくま新書)
- 韓国文化公報部 文化財管理局
- 1992 『韓国の民俗大系(済州道篇)』(任東權・竹田旦訳、国書刊行会)
- ホプスボウム, E レンジャー, T
- 1992 『創られた伝統』(前川啓治・梶原景昭訳、紀伊国屋書店)
- 政岡 伸洋 1995 「村落祭祀の日韓比較民俗試論ー大韓民国済州道北済州郡旧左邑金寧里の事例からー」(『アジアのなかの日本』、佛教大学総合研究所)
- 宮島 博史 1997 『両班』(中公新書)
- 尹 学準 1983 『オンドル夜話ー現代両班考』(中公新書)